道新聞（夕刊）　2019年（令和元年）12月13日（金曜日）　4

浦幌「信仰の灯は永遠に」展に寄せて

持田　誠

地域教会の歩み 史料化期待

2019年8月、ひとつのキリスト教会が十勝から姿を消した。日本福音ルーテル池田教会（日本福音ルーテル池田礼拝堂、プロテスタント・ルター派）である。

教会の歴史を地域の人々に知ってもらおうと、現在、浦幌町立博物館（桜町16）で開催している企画展が「信仰の灯は永遠に・福音ルーテル池田教会と吉田康登牧師の足跡」だ。本展では、池田教会の歴史と地域との関わりをテーマとしているが、実はもうひとつ、地方史におけるキリスト教史の位置づけについて問題を提起している。

北海道に限らず、日本のキリスト教史は、近世以前のキリシタン時代、それに禁教解除後の明治開拓期を中心に記述されている。一方、その後各地方にどのようにキリスト教が定着していったのか？自治体編さんの市町村史には、ほとんど記述がない。キリスト教の地域における実情を知るすべが、ほぼないのが実情なのである。

もちだ・まこと　1973年、横浜市生まれ。酪農学園大卒。博士（農学）。浦幌町立博物館学芸員。北大総合博物館資料部研究員。

一時的にでも教会が存在した地域は、一定の人々にとっては神社や寺院と同じく、キリスト教会が、精神的支柱としての役割を果たしていたはずである。歴史に教会の記述がないことは、その地域の形成・発達過程におけるキリスト教（会）の役割を、なかったことにしてしまうのと同じである。

市町村史におけるキリスト教史の問題については、『札幌キリスト教史の研究』（2019・北海道出版企画センター）のなかで著者の鈴江英一さんが述べているように、歴史学者から指摘がある。では、モノから地方史を記録する博物館ではどうだろうか？

残念ながら、これがまた欠落しているのである。

博物館では、教会建築など文化財的な観点から、地域のキリスト教会を扱うケースは多い。ところが、教会の形成や消滅について、資料収集や調査研究を展開している博物館は、非常に少ない。

池田教会の大きな特徴は、その形成が、教団中央や海外宣教団の主導によるものではない点にある。

この教会は、思いあって戦後入植で北海道へ渡った、元牧師の吉田康登さんと、彼をとりまく人々との交流から生まれた。彼の真摯な姿勢に心を動かされ、やがて地域に信仰の輪が広がって、教会を作ろうという動きに発展するという、戦後の北海道キリスト教会史上、特筆すべき稀有な事例なのである。

ここには、キリスト教学の見地からは開拓伝道の本質的な姿を、地方史の観点からは、戦後の新時代に、人々が新たな精神的支柱を求めたという実相を見るに違いない。それは、北海道農村におけるキリスト教史の一断面として、記録するに値するものと確信している。

本展では、吉田さんの足跡を中心に、教会の誕生から廃止までを紹介する。展示は、教会解体時に収集した資料と、吉田牧師のご子息への聞き取り、池田教会の後継となる帯広教会の岡田薫牧師はじめ皆さまへの取材資料によって構成した。

マルティン・ルターによる宗教改革から500余年。いま日本の農村は、キリスト教衰退期に入っている。このままでは、キリスト教が根付き、教会が存在した時代があるという歴史が記述されないまま、地域から忘れ去られてしまう危険がある。本展がきっかけとなり、各地の博物館で、地域のキリスト教会史の資料収集へ目を向ける動きが生まれてくることを期待したい。

＊

企画展「信仰の灯は永遠に―福音ルーテル池田教会と吉田康登牧師の足跡」は1月19日日まで。月曜、30日～1月6日休館。無料。

展示室に再現した池田教会＝浦幌町立博物館

初代池田伝道所の前に立つ吉田康登牧師（右端）＝1959年ころ

©北海道新聞社